

「九年前の祈り」

小野正嗣

受苦の向こうに見えるもの

阿部公彦



講談社 1600円＋税

小野正嗣の四つの中短編が一冊にまとまった。表題作はこのほど芥川賞を受賞した「九年前の祈り」。でも、これだけ読むよりは四つを通して読むのがいい。なるほどね、と思ふ仕掛けがいろいろある。たとえば「お見舞い」の最後で主人公のトシが助ける大学生は、一見この馬の骨ともしれないただの観光客とも見えるが、実はそれに先立つ「ウミガメの夜」ではれつきとした主人公だった人。「悪の花」でこの世ならぬ人として聖者めいた扱いを受ける「タイコー」は、「九年前の祈り」に、脳腫瘍を患う、みっちゃん姉の息子として登場する。こんなふうな『九年前の祈り』の各作品は、互いに寝技をかけあうかのように入り組んだ巴模様のなしているのだ。一

のかもしれない。しかし、今あげた作家たちと小野正嗣には興味深い違いがある。前者が地域に古くから宿る土俗的な想像力のようなものを喚起しつつも、それと拮抗するようなエゴの物語にもこだわったのに対し、小野の小説世界は土地には深く根を生やす一方、不思議とエゴからは自由だということである。

たしかに各作品で焦点があたるのは、背後に重たい過去を抱えたり、差し迫った困難に直面した人々だ。「九年前の祈り」のさなえはカナダ人の夫と別れて一人で息子を育てているのみならず、その息子がパニック障害めいた痼の強さを示し、扱いが難しい。「ウミガメの夜」の一平太は祖父との思い出の地を訪ねるが、東京に残してきた母は重大な病に冒されている。「お見舞い」のトシを取り巻く幼なじみや親類はそれぞれに生きるのが上手ではない人たちがばかり。そして「悪の花」の千代子は老齢に達した今、子供を産めなくて離縁された自分の過去を振り返りつつ、そこにときおり姿をのぞかせた「悪の花」のことを思う。

つまり、たしかにそれぞれが葛藤を抱えているのだが、彼らに共通するのは受苦の姿勢だ。暗い衝動に突き動かされて荒野をさまよったり、巨大な頂をめざしたりといった人物はいない。みな、どちらかと言えば穏やかな

方で主役級をはっていた人物が、別の作品ではいとも簡単にその地位を手離し、「いやいや、私なんぞただの脇役ですから……」とひっそり日陰に佇むこともあれば、お？ この人はそんなに重要人物だったのか！ とびつくりする一コマもある。

こうした仕組みが可能になるのは、この連作では人物間のヒエラルキーが流動的だからである。さなえ（「九年前の祈り」）、一平太（「ウミガメの夜」）、トシ（「お見舞い」）、千代子（「悪の花」）にはそれぞれ主人公性のよくなものが与えられてはいるものの、各作品中ですらその意識には他者の声が入り混じり、時間が前後したりして主人公としての地位はどことなく不安定。ましてや四篇を結べば、

「いい人。ただ、まるで慢性病のように彼の人生には何か降り積もりその荷の重さがじわじわと負担をかける、その疼痛めいた受難が、独特な情緒を生む。小説の隅々に、世界との付き合い方が不器用な人物たちが頻りに顔を出すことにもおそらく読者は気づくだろう。みっちゃん姉の息子タイコー、さなえの息子希敏、トシの幼なじみの伽……。ただ、たとえばフォークナーの「響きと怒り」のベインジーや、大江作品に出てくる障害を持った息子のような極端な存在ではないし、彼らの不器用さはあくまで間接的に描かれるのみ。

そんな世界を動かすのは強烈な意思や欲望ではなく、形の明瞭でない関係性の連鎖だ。いつの間にか主語が目立たなくなる文体にもそれはよく表れている。とにかく人がたくさんいる。発言同士が重なり、混じり、ほとんど誰のものかさえわかわらない。一般に、屹立した個人のエゴを柱にした方が小説世界はつくりやすいものだが、小野はあえてそれをしない。そのかわり、人の境目が滲みふつと軽く溶解するのを書く。それが実にうまい。「悲しみはさなえの耳元に口を寄せ、憑かれたように何かをささやいていた。聞きたくなかった。聞いてはならない。顔をさらに息子の頭に、柔らかい髪に押しつけた。熱を感じ

突出した存在は目につかない。結果、彼らの主人公らしさはバトンのように、或いはラグビーボールのようにすると別の人物にパスされ、終わってみるといくつもの小高い頂きをもった峰がちらちらと見え、世界がとめどない連続感とともに眼前に広がるという構成になっている。

小野がこのような仕組みを選んだのは、何より際立たせたかったのが土地そのものだったからだろう。大分のさびれゆく集落をこの作家が思い入れをもって描いてきたことはよく知られている。それは中上健次の新宮や大江健三郎の四国の山奥から、さらにはフォークナーのヨクナパトリアへとつらなるような神話的な世界の創出を念頭においた企てな

た。かすかに潮の味がした。息子のにおいが鼻いっぱい広がった」（「九年前の祈り」）。

強烈な拒絶的な体臭ではない。匂いを通して、個が個であることから解放される。小野正嗣の世界ではイメージや出来事も混濁し、ひょいといれ替わる。離縁された学校の用務員になった頃の千代子がときどき校内で目撃したという「悪の花」も、一つの花であることを超え、さまざまな形状になる、色も定まらない不定形のものである。「以来、どんな形状をして、どんな色で現われようとも、その花だとわかった。ちがう姿かたちをした花なのに、どれも同じ花だった。なぜなら、その花が現われると決まって、開いた花の奥から何かが漂ってきて、下腹部が同じ隠微な生暖かさに包まれたからだ。どうしようもなくいやらしい気持ちになった。千代子はこの花をむしってくれとタイコーに頼む。「あのな、あの花がな、また生えておるんよ」ところが、傾くタイコーの、その顔にもまた花があった。「すると、タイコーの顔にも笑みがひとつの花となって咲いた。虫食い穴だらけのいびつな花弁が揺れていた」。作品世界を象徴するような、不思議と明るい美しい場面である。受賞作もいいが、評者はこの「悪の花」の魅力に打たれた。